



TITLE:

京大上海センターニュースレター 第52号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科上海センター

CITATION:

京都大学経済学研究科上海センター. 京大上海センターニュースレター 第52号. 京大上海センターニュースレター 2005, 42

ISSUE DATE:

2005-04-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/26369>

RIGHT:

京都大学経済学研究科上海センター

河上肇がなくなったのは終戦後まもない1946年の1月30日で、来年は没後60周年になる。経済学部は1979年の10月20日に河上肇生誕100年記念講演会を催したが、それから数えても四半世紀が経過している。経済学研究科・経済学部は、この間の歴史的経過をふまえて、政治経済学と経済思想における研究・教育の新たな発展をめざすために、3月16日にこの偉大な先達の名前を冠したシンポジウムと講演会を催した。シンポジウムは午後の2時から5時半まで、講演会は6時20分から8時20分まで、いずれも時計台百周年記念ホールで開催された。シンポジウムと講演会を合わせて400人近い老若男女の聴衆

が集まり、河上肇への畏敬の念がまだ衰えていないことが示された。研究科・学部の21世紀 COE プログラムと上海センターが共同して実施にあたり、総司会を八木紀一郎が担当した。

シンポジウムのテーマは、「中国と日本の政治経済学」が選ばれた。これは近年の中国経済の躍進と対外開放化のなかで、河上肇の探求も、彼によって広められた政治経済学も、東アジアの近現代史のなかでのその意義が見直されているからである。はじめに、『甦る河上肇—近代中国の知の源泉』の著のある三田剛史さん（学術振興会特別研究員）が、河上と中国知識人のかかわりからはじめて、かれらの共産主義とのかかわりの背後に儒家的な思想的特質が見られるとした。アモイ大学の張小金教授は、『資本論』の中国語への翻訳をおこなった王亜南を紹介し、哲学・思想においても見識をもったすぐれた学者であったと述べた。本学の大西広、山本裕美、本山美彦の3教授もパネルに加わり、それぞれ、中国のマルクス経済学の現状、中国における政治経済学者の受難と経済改革への影響、中国と日本の思想のなかのマルチチュードの像について論じた。討論においては、東アジアにおける思想遺産の意義、政治経済学の市場経済に対する態度、社会主義をどう理解するかなどが、フロアからの発言も交えて議論された。

記念講演会の部では、はじめに中野一新本学名誉教授（河上肇記念会代表世話人）が「河上肇と京都大学」について語られ、その後、住谷一彦立教大学名誉教授（東京河上会代表）による講演「河上肇と比較経済思想—河上肇におけるヴェーバー的問題」がおこなわれた。この講演は、河上肇の「人と思想」を、「理念が転軸手となり、利害の力学が軌道を押し進める」というマックス・ヴェーバーの宗教社会学の構図から理解して、河上肇における「宗教的真理」の問題に解決を与えようとするものであった。住谷氏は、河上肇の探求を各段階をおってたどられ、表面における変化にもかかわらず一貫したエートスが見られると論じられた。なお、この講演会では、山口河上会の代表からのあいさつも受けることができ、また河上家ゆかりの方も参会された。

（文責：八木紀一郎）